

小学校と大学との地域連携について —小学生と保育を学ぶ学生が連携することの意義について—

Regional Collaboration between Elementary School and University

持田 京子* ・ 金子 智昭** ・ 林 真麻***

抄録 本学で実践している、地域の小学校と保育養成校との連携授業を振り返ったところ、継続的な連携授業の実践が、保育を学ぶ学生の学びを促進させる可能性がみえた。また、小学生と大学生が大学において継続的に連携することは、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有できる「学びの場」としての役割を果たす可能性が示唆された。

【キーワード：小学校・保育養成校の短大・地域連携】

I 緒言

文部科学省は、幅広い地域住民や企業・団体等の参画により、地域と学校が連携・協働して、学びによるまちづくり、地域人材育成、郷土学習、放課後等における学習・体験活動などを通じて地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進している。平成29年3月には「社会教育法」の改正により、地域学校協働活動を推進するため、教育委員会による連携協力体制の整備や、地域住民と学校との情報共有を行う「地域学校協働活動推進員」の委嘱に関する規定の整備が行われた。

中央教育審議会答申では、第2章第1節3家庭・地域との連携及び校種間の連携において、人権教育の効果を高めるためには、家庭・学校・地域が共に児童生徒を育てていくという視点に立ち、学校は「開かれた学校づくり」を進め、家庭・地域との連携を推進することが求められている。その際、学校からの明確なメッセージ、及び地域の多様な人々の参加とそれを可能とする日常的かつ多様な参加方法に留意し、家庭・地域の力を発揮できるようにする工夫が必要である、とされている。

筆者らの属する保育者の養成校であるS短期大学は市の「学び合い夢プロジェクト」【参照1】の協定のもとに、近郊の園や小学校と連携して、授

業時間（幼児教育者論）で地域の小学校や保育園と連携をした授業を行って6年目となる。（年間の予定・資料¹⁾）一般的に現代は核家族が多く、兄弟も少ない小学生にとって大学生と共に学ぶことは、人間関係の形成にとっても効果があると言えるだろう。また、同様に実習以外には6歳以下の子ども達としか接することの少ない大学生にとっても、小学生とコミュニケーションをとる経験を楽しみ、それらを通して児童の発達や関わり方を学ぶことができると考えられる。現在様々な校種間連携が実践されている。それらにおいて、どのような学び合いが求められているのだろうか。

阿部学（2011）¹⁾はC大学における招待連携のキャリア教育で毎年小学生との交流実践を行い、関係者間で教育内容が明確に言語化されたかたちで共有される必要性、暗黙のものとされてきた交流の背景や実践過程をエピソードとして言語化し、明らかにする必要性を述べている。学校間で行われる交流において、双方の互惠性が必要であり、またその地域に根ざす学校として、地域の特色も理解して取り組むべきであろう。それらをどのように言語化して共有し、振り返りさらなる実践につなげることが出来るのかが問われる。荒尾浩子（2010）²⁾はM大学において平成16年度から開始した英語教育コースのフレンドシップ事業で地域

* 埼玉純真短期大学 こども学科 准教授
** 埼玉純真短期大学 こども学科 助教
*** 埼玉純真短期大学 実習指導担当

の小学生を大学に招き、大学生が主導となる英語活動を計画し実施してきたが5回目の取り組みを迎え「季節の行事」をテーマにした指導結果において内容はよかったが子どもの自主性を課題としている。子どもの自主性は、それまでの経験や経緯があるため、一概にはいえないが、そこに至るまでの経緯をよく観察する必要があると述べている。

田口鉄久(2017)³⁾は 地域連携保育の教育的意義と課題において検討した結果、地域連携保育には ①地域の環境や自然、②地域の人々による祭りや活動、③地域の小・中・高・大学生・未就園児・年配者との交流、④園相互の交流、の4分野の必要性を述べ、校種間の地域連携教育において、大きな示唆を与えている。

しかし大学と小学校との地域協定を結び、大学の授業内で継続した学習を実践する交流はまだ見あたらなかった。大きな企画ではないが、こういった地域と密着して、小学校と大学が同じ目的を持ち、「開かれた学校づくり」に取り組むことは意味あることだと考える。また、今後もこういった取り組みの実態把握はわが国だけでなく、海外の実践把握をして学ぶことも必要だろう。本研究では、本学で6年間行われてきた小学校と保育養成校との交流授業の試みの実践とその意義と課題について考察することにする。本研究において取り上げる「地域連携授業」とは「保育者養成校が近隣の小学校、幼稚園、保育所などの教育・福祉機関と協力し、保育学生が児童や幼児など低年齢の子どもたちとの交流活動を通じて、保育者としての基礎的な資質や力量を育むことを目指した授業」と定義する。

本学と小学校と交流授業の概要

1) 趣旨 本学のあるH市地域連協定〔学び合い夢プロジェクト¹⁾〕における、(1)(2)の学び合いの考え方を基に校種間の連携を行う。

(1) 校種間の連携を図り、校種間交流の在り方を追求する。

(2) 地域の伝統文化を意識した市内の学校独自の豊かな体験活動の円滑な展開を推進するため、啓発に努める。

2) 具体的な目的

小学生

① 「一日大学生」となり、大学という学びの場を

知り、大学生と共に学びの輪を広げ、将来への夢を持つ。

② ものごとを広い視野で捉え、創造的に考える。

大学生(保育者養成校)

① 児童理解を深め、小学生と共に学びの輪を広げ乳幼児教育施設と小学校との接続の意味を考える。

② 小学校との連携を計画し、実践、振り返りのPDCAを通して、ものごとを広い視野で捉え、創造的に考える。

③ 地域にある保育者養成校である自覚を持ち、大学がある地域に目を向ける。

3) 本学のある地域の特徴

H市は豊かな自然に恵まれ、T川を隔てて他県とも隣接している豊かな自然に恵まれた地域であり、周囲は農業地帯で肥沃な田園に恵まれている。商工業の市街地となっており衣料の町として発展した地域である。人口は5万5千程度であり、大学は保育者養成校である短期大学一校である。

4) 参加校及び参加者(保護者は見学者)

① 小学校(参加校) H市公立小学校7校

参加者 H市各小学校校長・教頭・教員・支援員 児童・希望保護者参観

② 大学(保育の養成短期大学)

参加者 本学学生1年生130名・2年生130名
職員(写真・バス・給食等担当) バス運転手
教員2名(幼児教育者論担当者)

5) 取り組みの概要(2017年度)

毎年テーマに沿った内容を学生の意思を尊重して考え、実践する。学生の[連携委員]を募り、連携委員の主導のもとに連携を促進している。小学生と大学生関わりは基本的には1対1であり、人数によって調整する。大学生は連携のねらいとその日のテーマ及び具体的な課題を理解した上で、責任を持って最後まで教育的配慮を持って関わる。

【テーマ】「協同・創意工夫」

【交流の時期と方法】

《小学生》 各小学校の1年生が1年に1回来学して「1日大学生」として本学で過ごす。

《本学1年生》 交流回数計5回

少人数の小学校は2校合同で実施する。10月～1月の「幼児教育者論」の授業において2クラスずつ合同で、関わる。

《本学2年生》 交流回数1回

「幼稚園教育実習」の授業で幼稚園実習（後期）終了後に4クラスが合同で関わる。

【交流の流れ】（資料1参照）

（朝9：00～13：30）

- 朝
- ・小学生と小学校教員が来学（遠方は大学のバスで小学校へ迎えに行く
 - ・近くの小学校は大学生が迎えに行き、大学生と手つなぎで来学する。
- 授業
- ・小学生日直と大学生の司会のもとで本学教員が行う。
 - ・小学生の発表（歌や日常の学び）
 - ・大学生の発表（パネルシアター・手遊び・絵本読み聞かせ・紙芝居など、大学で学んだことを発表する。
 - ・大学生と合同で授業を行い、連携グループ班で、グループ学習をする。
 - ・学んだことを発表する。
- 昼食
- ・学食で共に食事をする
- 交流
- ・学校探検をする
- 帰りの会

6）取り組んだテーマと概略（2017年度）

以下に過去に行った連携授業での協同学習の概要と実践の際に小学校教員からいただいたアドバイスを参考に見出した課題を述べる。

【2017年後半～2018年度前半の協同学習】

○なぜ鳥は飛ぶの（科学）「ふわふわ鳥づくり」
軽い素材のスチレンで工夫して飛ぶ鳥を作り、皆で飛ばし方を考えて飛ばす。図1,2

【資料1】

（結果）パワーポイントで、鳥はなぜ飛ぶのか、という授業を行ったことで、学生と共に子どもの関心が高まった。・どの子どもも感覚的に楽しめる材料であり、夢中で飛ばす姿が多く見られた。・自分の鳥を作ることに興味を持ち、科学的にも「より良く飛ばすために」テープを貼ったり、鳥の羽の位置を工夫するなど、学生と共に考えることが出来た。

（課題）環境設定において、子どもにとって教室から体育館へ行くなど、移動距離が遠く前もって場所の提示など行えばよかった。・予想以上に出来栄に差が出て飛ばないものもあったので、予備の材料の数の確保が必要であった。・学生の意欲が様々であり、それらが子どもにも影響を及ぼすこ

とが見えた。



図1



図2

○昔遊び ずぼんぼづくり（伝統文化）昔の遊びを知り、日本の郷土文化に触れる・各自作ったものを使って競争して遊びを楽しむ。図3,4

（結果）「ずぼんぼ」という馴染みのない昔遊びを楽しむことが出来た。制作から遊びにつながる点では、学生が流れに沿って子どもを指導することが出来た。皆でコンテストを行ったことで盛り上がりが出来て楽しむことが出来た。

（課題）ねらいの「郷土の伝統文化にふれる」ことに学生が学びを深める必要性を感じた。また学生も知らない遊びで、学生の共通理解に差がでたため、予めの準備時間をさらに多くとる必要性がみえた。子どもの作業時間に差がでた。また「ずぼんぼ」の由来や意味などにも説明が及ばなかった。

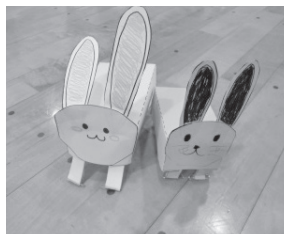


図3

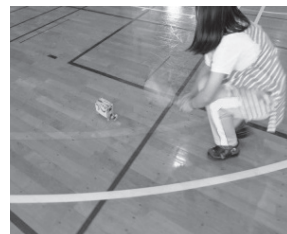


図4

○大きなクリスマスツリー制作（協同）小学生と大学生が協同して大きなクリスマスツリーをつくりあげ、鑑賞する。図5,6

（結果）クラス対抗で大学生と組んでツリーを作るといった協同作業を行った結果、非常に盛り上がり楽しいものだった。小学校の1年生のクラスでは出来上がった作品を大切にバスに載せて持って帰り、3月の学年終了まで飾ったということであった。

（課題）内容はゲーム性が大きかったため楽しいものであったと考えられるが、クリスマスツリーの由来や、道具の使い方、及び美的な感覚などの追及には至らなかった。



図5



図6

Ⅱ 結果

実践後の学生の感想で多かったもの

- 小学1年生の発達理解（特に2年生は実習後期の後であったため著しい）が出来た。
- 小学生とのコミュニケーションが楽しかった。
- 準備時間が少ないため内容がよくわからなかった
- 交流グループを通して、学生同士が協同する難しさが分かった。
- 計画をして、指導実践することから学べた。
- 責任を持って子どもと一緒に食事をする中で、アレルギー食などの理解などの安全面での気づきがあった。
- 配慮が必要な子どもに対する理解とその援助が分かった。
- 小学校教員の指導は幼児への指導と違うことが分かった。
- 同じ班でも考え方に温度差があった。

これらから、大学1年生は全般的に小学生と関わる楽しさを味わえるが、学生同士の連携への関心は薄いと考えられた。今後、授業の一貫としての地域連携という意識は持っているが、さらにそれらを自らの保育実践や小学校連携の重要性へとつなげようという意識が必要であると考えられた。こういった学生の自主的な連携を通した学びを促す授業は今後の教員の課題である。また計画遂行に至る、班同士の人間関係の葛藤も見られたが、これらの葛藤の克服は、保育者になった時にも役立つと考えられる。大学2年生は、幼稚園教育実習（後期）の直後であったこと、既に経験していることもあり、学びへの意欲や児童への配慮が多くみられることが分かった。これらから、学生が小学生との交流の経験や実習の経験を重ねることで、積極的に学びに向えることが推察できた。これらの感想の結果は、今後数値化してまと

める必要がある。そして、それらを振り返り、今後のより良い地域連携のために学生と共に改善を考えることが重要である。

Ⅲ 考察

これまで小学生と大学生の交流授業の概要を述べたが、次にそれらの意義について考察する。

1. 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて

文部科学省は『学習指導要領』（平成29年版）の前文において、中央審議会の答申において、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携、協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子ども達に育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことが出来るようにすることを述べている。「これからの時代に求められる教育」とは、少子高齢化・グローバル化・情報化（人工知能の進化）・雇用環境の変容などをも予測する教育であろう。このように急激に変化する予測困難な社会に対応するためには、子ども一人ひとりが自分の良さや可能性を知り、また他者を尊重して多様な人々と協働しながら社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手になることが求められる。

このような「社会に開かれた教育課程」を実現していくためには、保育を目指す学生が、それぞれの学校や幼稚園、保育所の教育の目標を踏まえること、学生自身が社会とつながりを持つために、何を学ばばよいのか必要な学習内容を、校種を超えて把握することが求められる。そして学生自身が、それぞれの特性を顧みた上で、「地域連携」の具体的なねらいを明確にすることが必要であろう。そのためには、こういった交流の中で校種間を超えて小学校の教師や大学の教師、或いは保育所の保育士同士が話し合い、学び合い、教育のねらいを共有することが実現への一歩となる。また今回の交流では、小学校教員から頂いたアドバイスは新たな視点を見出すことが出来、大学教員の学びになった。このような小さな積み重ねが、「社会に開かれた教育課程」につながるのだろう。

1) 小学校新学習指導要領から校種間連携の意義

を考える

新小学校学習指導要領⁵⁾の生活科の教科目標は(1)～(3)である。これらから今までの経験を振り返り、小学生と大学生の連携での可能性を提言したい。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

一社会及び自然の特徴やよさからの学び

小学生が大学生と学校探検や授業などで、校庭や学内の使い方や自然を味わうことで、様々な日常にはない気づきが促される。また、伝統文化を共に学ぶことで、社会により開かれた目を持つことが可能になると考えられる。大学生にとっても、小学生の自然への気づきやその創造的な発想などから多くを学ぶことができるであろう。また伝統文化を共に味わうことで地域社会へのつながりも深められるだろう。

一道具と材料の使いこなしやマナーの学び

道具の取扱い、材料の扱い方などを前もって図式などを用いて分かりやすく提示することで、道具の取扱い等の技能が身につく。このような大学生の手助けがあることで作業時間の個人差なども減り、小学生の自己肯定感にもつながる。これらは大学生にとっても今後の実習や幼児教育者として大いに役に立つことであろう。また、小学生と互いに食事をするすることで、「いただきます」「ごちそうさま」「ありがとう」や片づけなどの食事のマナーを互いに学ぶことができるだろう。

- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。

一自分の身の回りや生活についての表現

小学1年生の児童は「ふしぎだな、どうしてだろう」という意識を多く持っている。また表現力もある。しかしそれらをまとめて考えることや、技術を使つての表現が難しい側面もある。それらを大学生に認めて励ましてもらう中で、自信につながり自ら表現できるようになる。一方、大学生はある程度の総合的な思考や技術を持っているので、1対1での関わりにより、小学生の様々な気づきを、言葉にして明確にする中で、日常にはない創造的な思考に気付いたり、小学生と共に表現力

を深めることができるだろう。

- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

一協同意識を考える機会

小学生は大学生とグループを組み、共同作業をすることで、人と協同する大切さへの気づきを促される。また大学生は準備時間の設定、実践、振り返りのなどPDCAをすることで、大学生同士が協同する大切さに気付く。また、大学生は同じグループ同士でも、小学生がいることで協同意識が深まることがみえ、校種間を越えた協同する経験を積み重ねることでその意義がみえてくるだろう。今後の教員の指導に、大学生にも十分に時間を取り学生同士が「自分の意見を言う」「人の意見を聞く」「互いの意見をまとめる」などの話し合う機会を重ねる必要性が考えられた。

2) 地域に開かれた「教育課程」の考察

本学における交流は「保護者が自由に参観できる」ということが地域に開かれていると考えられる。父兄に口頭でインタビューを行うと「本当に子どもたちがいつもと違う環境で楽しそうだった」と声を揃えて述べている。おそらく、小学1年生にとっても、自由に参観できる父兄にとっても、交流の場が何らかの形で「よいもの」「楽しいもの」と思っていると考えられる。教員がこれらをもう少し進めて、保護者にとっても「開かれた教育課程」の理解を促進するために「交流内容や目的」などを分かりやすく提示して配布する必要性が見えた。このように地域に住む保護者にも学習の目的を知らせて「地域連携」を共有していくことで、保護者が地域にある大学の教育や大学生にも目を向ける機会が増える。また、保護者が来学して地域連携授業に参観や参加することで、小学校、大学、地域がつながり開かれた教育課程に近づけるのではないだろうか。それらのことから「学びの場」としての大学の役割が見える。

今後、保護者の参加に、さらに目を向けて、その可能性について検討していきたい。

2. 地域連携の可能性

小学校と大学の連携には互恵性が必要である。これらの試みにおいて、大学側は単に小学生が来る、という意識ではなく「共に協同して学び合う」

意識が必要であろう。そしてこれらは、継続的に行うことで意味を持ってくる。連携において互いにどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするかを明確にすることは重要である。学びには、ねらいがあるからこそ、それらを振り返り、改善することが出来る。

文部科学省では平成22年8月の「学校教育の情報化に関する懇談会」において、21世紀の情報社会では、「こと（知識）創り」を重視する教育への転換が求められるとしている。21世紀の知識基盤社会で求められる能力（21世紀型スキル）として、情報創造力（こと創り）のほかに、批判的思考力、問題解決力、コミュニケーション力、プロジェクト力、ICT活用力等がある。このような21世紀型スキルは、これまでの「もの（物）」はまねてつくってもそれなりの価値があるが、「こと（知識）」はまねてつくっても価値は生じない。21世紀型の知識基盤社会は、新しく知識を創出し続けることに大きな意味を持つ社会である、としている。

本学学生の交流の感想などから、その学びを顧みると「思考の方法」や「創造力とイノベーション」「批判的思考」は少なく、今後の構築を深刻に考える必要性が見えた。しかしこれらの内容は、直ぐに身につくものではなく、日常的な学びから構築されるものであるため、他の授業とも関連付けながら、自ら調べ、自分の考えを話し合う経験を重ねることが重要である。また、自分を知り自分の行ったことに対する評価やグループで行ったことに対する評価なども必ず行う必要性がみえた。これらの学びが促進できれば、交流する小学生にとっても、大学生に考えを受け止めてもらう、アイデアを新しくもらう、多くの意見をもらうなど、多様な考え方があることを経験できる。「仕事の方法」としての情報リテラシーでは、大学生が計画段階で様々な情報を調べたり、情報機器を使って発表することを経験することで、情報に対する取扱いなども学ぶことができ、小学生にとっても大学生に情報機器の取扱いなどについて、興味を持って知ることができる。「仕事のツール」としてのチームワークでは、小学生との合同班での企画、実行によって、大学生と小学生が互いに学び合い、構築できるだろう。また、小学生も大学生との合同班により多くの学びを経験できると考えられる。「社会生活」における社会における責任（文化に関

する認識と対応）キャリア等においては大学生が地域の小学生と関わり、また保護者とも関わることで、地域に対する愛着を覚えたり、保育者として子どもに関わる責任や喜びなど様々な気づきが期待できる。小学生にとっても大学生や大学の教職員と関わることで、地域の大学を知るだけでなく自分の大学生活など、将来に向けて夢を持ち考えることが出来るだろう。小学校教員の知見をさらに活かして大学生への指導など頂く機会を持つことで、さらなる学びの深まりの可能性が見える。

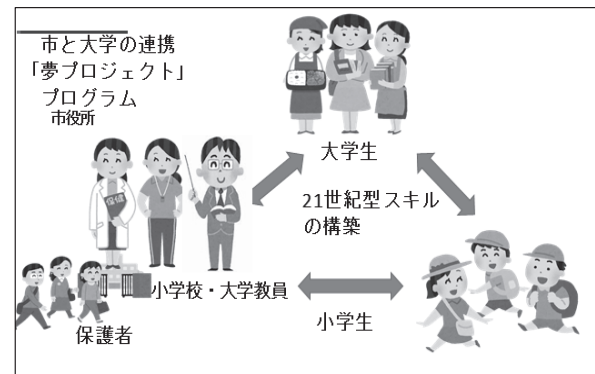


図7

佐藤学（東京大学大学院）⁶⁾は21世紀型のカリキュラム改革（その特質と構造）において「専門家共同体」の構築を述べている。このように参加している者すべてが、それぞれの立場で連携の趣旨を理解する経験を深めることで、信頼関係が深まり「学びの場」が構築されていくだろう。例えば、学生がその意味に気づいた上で「連携」の計画や準備をするならば、言葉がけ一つにしる自ら変わり、小学生の応対の変化から図7のような互恵的な学びがさらに広がると考えられる。それらは、今後保育者として社会に出た際にも、活かすことが出来る。今回の研究を通して、継続的な地域の小学校との連携授業の実践が、保育を学ぶ学生の学びを促進させる可能性がみえた。また小学生と大学生が大学において継続的に連携することは、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有できる「学びの場」としての役割を果たす可能性があると考えられた。小学校との連携において大学が地域に開かれた「学びの場」になるためには、今後の大学教員の校種間を超えた学校理解と地域に関する学びが求められる。それによって小学校や大学側からの、明確な子ども達や学生、及び地域

への発信ができるだろう。これらを継続的に行うことで地域に根ざしたものとなっていくだろう。これらの結果を出すには、さらなる研究が求められる。

謝辞 連携に協力頂いている小学校の教職員，児童，児童の保護者の皆様方に心から感謝申し上げます。

【参照1】

H市「学び合い夢プロジェクト」について

H市と本大学は地域社会の発展に資するため、人的資源、知的資源、物的資源の交流を促進し、教育、文化、産業などの分野において連携及び協力に関する協定を締結している。小学生との交流においては小学1年生が「1日大学生」として本学を訪れ、大学生の準備のもとで、一緒に授業を行い、学びを深める。

主旨・小学生は一日大学生として大学生との交流を深めることによって、新たな人間関係を築くことが出来る。また交流授業を通して多くの気づきを得、今後の学びの参考となる。大学生は子ども理解を深め、自らの保育観を持つことが出来る。授業の準備や交流の過程を通して、小学校教員からの学びを得、幼児教育者としての発達理解、幼少連携などに目を向けることができる。

(引用文献)

- 1) 羽生市小学校「1日大学生」実施要領・羽生市・埼玉純真短期大学20015「小大連携によるキャリア教育についての一試論--教育内容が明確でない実践に意義はないのか」阿部学 千葉大学人文社会科学研究 (23) , 283-291, 2011-09
- 2) 「学生主導による英語活動」荒尾浩子 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 (30) , 89-94, 2010
- 3) 「地域連携保育の教育的意義と課題」(創立50周年記念号) 田口鉄久 鈴鹿大学短期大学部紀要37,115-124,2017
- 4) 「地域金融機関との連携による金融経済教育の開発と実践」大藪千穂 奥田正之 生活経済学研究43, p 53-63,2016

- 5) 小学校「学習指導要領」平成29年3月公示
- 6) 平成29年版 小学校新学習指導要領の展開 生活編 単行本 - 2017, 明治図書
- 7) 総務省ホームページ「域学連携」地域づくり活動の事例
[www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/...](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/)
- 8) H市「学び合い夢プロジェクト」H29,6,14

資料 1 「地域連携」年間計画例

小学校・保育園との連携（幼児教育者論）年間予定表

- 1、地域にある大学と、地域にある小学校、そこに住む子ども達や保護者及び学校と連携することで、地域について関心を持ち知ることができる。
- 2、幼児教育と小学校教育の接続について知ることができる。
- 3、小学校教員の子供への指導から学ぶことができる。
- 4、小学校からの指導や感想をいただき、授業を振り返ることができる。
- 5、小学生との授業を計画、実践、評価することで、PDCA を学び、保育実践力をつけることができる。
- 6、羽生市相互連携プログラムに参加する高い意識を持つ。

今回のテーマ「協同・創造」

水曜日 1, 2 限	大学の連携クラス	小学校名・人数	内容
10 月 17 日	1 年 A・B	M 学校 1 年 14 人 M 小学校 1 年 9 人	シャボン玉の不思議
10 月 31 日	1 年 C・D	S 小学校 2 年 58 人	秋の所縁に目を向ける (アイパットを通して)
11 月 7 日	1 年 A・B	I 小学校 1 年 52 名	秋の所縁に目を向ける (アイパットを通して)
11 月 21 日	1 年 C・D A・B	T 小学校 1 年 40 名	科学しよう 協同制作 (ロケット)
12 月 5 日	1 年 A・B C・D	S 小学校 1 年 58 名	協同制作 (クリスマスツリー)
12 月 12 日	1 年 A・B・C・D		D 保育所の所長先生講義
1 月 16 日	1 年 C・D	S 1 小学校 1 年 21 名	日本の文化 (昔遊び)
他 (1 月予定)	1 年 C・D	H 保育園 年長クラス 25 名	お店屋さんなど

○詳細は地域連携委員と話し合い決定します。

○グループごとに計画にねらいを持ち、実践する中で子どもの観察をして気付きを考え、また自己評価をすることで実践力をつけてください。

○自らのアンケートを顧みて成長を考え、簡単な学びのルーブリック表を作ります。

○小学生と生活を共にするため、給食費が必要になります。

平成 29 年度 S 小学校と本学 1 年 A・C クラス（授業「幼児教育者論」）との交流授業

日時 平成 30 年 1 月 16 日（火）		
9:30	1 年 A・C クラス 学生集合 学生	学生集合 準備を終わらせてそれぞれの教室に 9 時 30 分に集合 持ち物 道具箱・のり・はさみ・セロテープ・名前ペン 体育館準備 A・C（荷物は 210 に置く・貴重品はロッカー） ・エントランスへ整列・お迎え A:9:50 までに整列 C:10:30 までに整列
9:30 9:40 9:45 9:55	1 便大学発 須影小学校着 須影小学校発 1 便 大学着 	大学生 3 人乗車（行きの係り及びお昼の配膳係り） 1 年 1 組バス乗車・バスレク担当：（事務 林） （A ）（A ）（A ） 9:50 大学生 A クラス迎え（上履に履き替えて、靴はエントランスに置く） 荷物をエントランスに置いて学校探検 10:30 分までに排泄、水飲みを済ませて 206
9:55 10:05 10:10 10:20	2 便大学発 須影小学校着 須影小学校発 2 便 大学着 	大学生 3 人乗車（行きの係り及びお昼の配膳係り） 1 年 2 組バス乗車・バスレク担当：（事務 林） （C ）（C ）（C ） 10:20 分 大学生 C クラス迎え（上履に履き替えて、靴はエントランスに置く） 児童と大学生はペアで 206 10:30 分までにトイレ、水飲みは終えて 206 へ
10:30	206 で開会式	入口黑板 ○○○— ○○○— ○○○— ○○○— A クラス 1 年 1 組 1 年 2 組 C クラス ○荷物は椅子の背にかけて着席
10:30	1 組 日直 司会（ ） 挨拶 司会者 小学 1 年生 授業者 司会者	1 年 1 組日直・3 時間目の授業始まりの挨拶 須影小の先生のお話（校長先生） 須影小学校 1 年生から出し物 1 組（ ） 2 組（ ） 授業「なぜとぶの？」 飛ぶもののからの学び・パワーポイントで(本学教員) 制作の話
11:00	1 組 日直	1 年 2 組日直・3 時間目終わりの挨拶
11:00	トイレ休憩体育館へ	
11:10	1 組 日直 制作始まり	それぞれのグループになる(まだ材料は触ったりしない)机の所で待機 1 年 1 組日直・3 時間目の授業始まりの挨拶

11:30	制作終了	制作スタート
11:35	飛べ飛べコンテスト	終わりの合図で班ごとに片づけて丸くなって座る。小学生内側大学生外側
11:50	表彰 感想	1組・2組へ 1年生
11:55	2組・日直	工夫した所など言ってみよう 1年2組日直・3時間目終わりの挨拶
1年1組		1年2組
12:00	1組・A組 班ごとに学生とカフェテリアへ移動	12:05 2組・C組 班ごとにお姉さんと学食へ
12:05	手洗い、支度を済ませて食事をとりに行く。	12:10 手洗い、支度を済ませて食事をとりに行く。
12:15	児童が揃ったら 日直さん いただきます。 (終わったら自分たちで食器を中に重ねます)	12:20 児童が揃ったら 日直さん いただきます。 (終わったら自分たちで食器を中に重ねます)
12:30	小学生、学生と一緒に楽しくいただきます。	小学生・学生と一緒に楽しくいただきます。
12:40	ごちそう様・日直さん	12:45 ごちそう様・日直さん 
12:45	帰りの支度をして、トイレに行ってから学生 ときのこへ	小学生・学生と学校探検へ
13:00	帰りの会 司会 () パネルシアターや絵本など () 須影小学校の先生のお話 折り紙贈呈 さようなら	13:20 帰りの支度をして、トイレに行ってから学生と ときのこへ 13:25 帰りの会 (きのこ) 司会 () 須影小学校の先生のお話 さようなら パネルシアターや紙芝居など ()
13:20	1年1組バス乗車 (事務)	
13:30	須影小到着	
		13:40 1年2組バス乗車 (事務) 13:50 須影小到着

ふわふわどりコンテスト

